幼稚園の自然観察環境について

——自然観察モデル幼稚園の構想——

頌栄短期大学　松村義敏

一、自然観察モデル幼稚園

私はかつて「全国の植物園に幼稚園を併設せよ」[1]という突飛な意見を発表したことがある。これはある立場からは実に無暴な叫びであったと思うが、これを裏返していえば幼稚園の環境が植物園のようであってほしいということに外ならない。

私はまた「幼稚園の緑化」[2]という題で愚見を述べたことがあったが、これも全く同じ意園の下に幼稚園の環境を、積極的に、人為的に改良し、育成していく一つの具体的方策を述べたに外ならない。

それはあたかもフレーベルが、自分の教育所にいかなる名を与えんかと思いつづけていたときに、その名を幼稚園とつけたときの感覚を思うと当然この自然環境の育成をおろそかにしてはならないと思う。

(1)植物趣味第十二巻第十二号(一九五〇)

(2)保育第五巻第三号(一九五〇)

すなわち彼は、スタイゲル山の上から、ブランケルブルグの勝景をながめ、その美にふれ「見つかった、その名はキンダーガルテン」[3]と叫んだそうであるが、園児は正に自然の花園における植物にたとえられ、美しい環境であるためには、人の心の美に加えるに自然の美をもってせねばならないことはいまさらもうすまでもない。

しかるに今日は都会の幼稚園はもちろん田舎の幼稚園においてさえ、建物とわずかばかりの屋外遊具が備わっているような現状である。

いうまでもなく、決してこれで満足しているわけではなく、経費の問題がからんでいることは分るが、費用を使わぬでも、環境を自然に近づけていくことはできるから今少しその方面の努力をはらってほしいと思うものである。

(3)庄司雅子(一九四四)フレーベルの教育学一〇五頁

近頃多額の費用をかけて、各所に設けられているモデル幼稚園においてさえ、建物の近代的色彩は申し分はないが、私の見たところではその環境が、自然美と、自然観察の保育に事欠いているように思う。

そこで私はせめて日本に一つ位は、まず

立派な自然環境を選んでそこに理想的な建築を配して、いわゆる自然観察のモデル幼稚園を設定し、他の保育項目に比していわば立ちおくれたこの自然観察保育を指導していくものがあってもよいのではないかと思う。

二、自然環境の育成

自然観察環境を人為環境と自然環境とに分けることはこの論を進めていくのに必要である。前者は人工的な施設に相当し、後者は、一定の風致をもった自然そのもの、またはそれとほぼ等しい状態のものを指すのである。

幼児の生活において、自然の中でいろいろな経験を豊かにもたせることが、一般保育はもちろん、とくに自然観察保育の主要なねらいであるとすれば、人為環境がとともにのっていることは無論大切なことではあるが、自然または自然に近い環境が何としても、より一層大切であって、これが近代的保育の場とならなければならない。

このことは何ものにも勝って審美的感覚と自然科学的「芽生え」を伸ばすのに役立つものであって、これをいかにしてとり入れ、また育成していくかが今日課せられた問題であろう。

近頃ときどき大家の邸宅が開放されて、幼稚園をその中で経営しているという例が見られる。これはもともと人為的なものであり、しかも幼稚園として計画されたものでないから、理想的とはいえないし、また自由に活用するのに不便を感ずるではあろうけれども、多くの場合これは規模が相当大きくて、自然を充分に感じとれるので、やりようによっては自然観察保育の目的を充分に果すことができると思われるので、関係者はその特色ある環境を生かしていただきたいと思う。

しかしこのようなことはだれでもが望めるものではないし、またはじめから自然に恵まれたところに幼稚園を設けることは、これまた困難であるので、時間をかけ、手間をかけて、自然に近い環境に仕立てていくことが大切であろう。

それには心して種子を蒔き、リンゴ一つの種子もおろそかにすることのないようにして、これを育て、また植樹を心がけるべきである。

実際三十年の歴史をもった幼稚園で、その創立のときに植えた樹々が今では全く見ちがえるような大森林となって、自然化しあたかもはじめからあった自然のままの森のようになって、美しい自然環境を構成している例も少なくない。

幼稚園の植樹計画はどうしてもこういう教育目的に沿って行われなければならないのであるが、同時にそれが、経営上にも役立つように考えられれば一層よいことと思う。

すなわちまず幼稚園の建物の持久年限が五十年と見れば、その五十年後に改築の必

要が起って来るので、その改築用材を、全部とはいかなくとも、少なくとも半分位は補給できるように考えて、植樹の樹種を選ぶことである。

むろんそのためには、その土地の気候風土が適するか否かが問題になるけれども、それさえ適当であれば、スギやヒノキ、ケヤキ、センノキ、マツなどのいわゆる建築用材を主体として配植するとよいと思う。

私は独り幼稚園に限らず、いやしくも教育機関でその環境の殺風景なのは大きいマイナスであるから、この植樹が第一に環境の美観をととのえるに役立ち、第二にそれが自然観察の場となり、第三に右に述べた実用的な意味をもつものでありたいと思うのである。

三、自然環境に加えたいもの

こうして自然環境がととのって来ると、その中に、できるだけ自然に近い形で動物を配して、静的なものから動的なものにしていきたい。たとえばサルその他の小家畜舎はもちろん、もっと自然な姿のものとして、シカや七面鳥のようなものを放ち、また池を設けてガチョウ、アヒル、オシドリなどの水鳥を放ち、さらに水草の育成、水棲昆虫を住わせることが望ましいことと思う。

林木には各種の巣箱を小鳥のために設けることを忘れてはならないと思う。すなわち小鳥をせまい籠の中にとじこめることは自然環境のととのっていない場合にはやむを得ないことであるが、小鳥の観察は自然のままでやることが本当だと思う。このためには、庭の一角のよく観察できるところに、小鳥の食堂をつくってやることである。つまり餌をやる台すなわち四本脚または一本脚の小テーブルであって、この上に水の皿をおき毎朝パンクズや、米や小麦を撒いてやるので、こうすればいろいろの小鳥がにぎやかにおりて来て、人の気配をおそれることなく、仲よく餌をあさるようになって来る。

この方法によると季節に応じて異なった鳥を見ることができ、ときおり渡り鳥がその往き来に立ちよって、数日をここに滞在していくこともあり、小鳥を、彼らの自由活動において観察することができる。これはすでに米国あたりで各所に行われていることであり、私も試みて成功をおさめたことである。

次に森林の外に、野草の生いしげる区域をもつことである。むろん田圃をその周辺にもち、野草に不自由ないところではこのようなことは必要とはいえないが、要するに野草すなわち雑草の中には各種の昆虫やその他の下等動物が巣くらうことであるし雑草の観察と相まって、これらの動物の生態観察もできるし、また昆虫と植物との関係、たとえば食物や花粉の媒介などについて理解する機会が与えられる。

飼育箱で昆虫を飼うことも、小鳥を籠で

かうことと同様に、自然環境に乏しい場合の、やむを得ない方法であって、なるべく戸外で自由遊びの中に観察経験をつむようにしたいものである。

こうした草原（クサハラ）の他に人為的なものではあるが、花壇や、温室は大小にかかわらず、ぜひととのえたいものである。とくに都会地では、花壇は非常に効果的なものと思う。

四、自然観察環境の理想目標

ここで私が考えて見た自然観察環境として望ましい施設目標を示すことにする。もとより、幼稚園の現実からするとほど遠いものであるかも知れないが、理想は高いところにおいて、漸次不足を充しつつ、これに近づくよう努力を払っていただかねばならぬと思う。これらについての詳細は次回にゆずりただ項目のみを示すことにする。

（つづく）

1. 屋外環境

1 樹蔭（森林樹木）
2 小動物舎
3 花壇
4 池、小川
5 草原（野草）
6 菜園
7 芝生
8 砂場
9 徒渉プール
10 禽舎（小鳥の家）
11 鉢植棚
12 日蔭棚（藤、バラ、アケビ等蔓植物）
13 花園
14 巣箱
15 果樹園
16 フレーム
17 遊具
18 水槽（水族槽）
19 温室
20 アーチ
21 水田
22 生垣
23 築山
24 百葉箱
25 トンネル
26 バードテーブル
27 特技の教諭
28 誘蛾燈

2. 室内環境

1 自然観察室
2 鉢植
3 花瓶（活花）
4 水槽（水棲昆虫、魚類等）
5 飼育箱（昆虫、カゲ等爬虫類、小動物）
6 標本展示
7 出窓
8 環境画
9 水栽瓶
10 顕微鏡
11 望遠鏡
12 蟲眼鏡
13 映写設備
14 温度計等
15 図書
16 レコード（鳥の声など）
17 楽器

3. 園外利用物

1 公園
2 神社の森
3 自然の山
4 海岸
5 河原堤防
6 池沼畔
7 田畑
8 植物園
9 動物園
10 水族館
11 博物館
12 牧場
13 工場
14 プラネタリウム
15 停車場、車庫
16 名所（ボタン、ハギ、ツツジ、ヤマブキ、ウメ、サクラ等）
17 野原
18 店舗（デパート）
19 気象台（天文台）
20 映画館